

Title	独占と競争：シュムペーターについて
Sub Title	Monopoly and Competition
Author	山部, 徳雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.1 (1953. 1) ,p.39- 52
JaLC DOI	10.14991/001.19530101-0039
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19530101-0039">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19530101-0039</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

るピグウには、同時に欲望満足についての個人主義的倫理が潜在している。このことは先に論じた所であるが、その限りにおいて決して無内容でもなく、又空虚でもない。倫理學の領域においてカントの斷言命令は形式のみであつて無内容であるといわれる。彼の命題の一つはこうである「汝の行爲の法則が汝の意思によつて普通の法則となるが如くに行動せよ。」この命題は、人が自分の一つ一つの行爲についてその倫理性を反省するとき、ある規定的意味をもつている。併し之は消極的な規定である。この規定からして我々は、正しいことは自分にも、他人にも共に正しいこと他人の善をも自分の善と同じく價值のあるべきことを教えられるであろう。併しこの規定は他人にも自分にも正しいものとは何であるかを教えないのである。イギリスの倫理學者ラッシュェダグが指摘せる如く、カントのかかる命題は丁度倫理學における矛盾律の如きものである。それは眞理の消極的規定であるが、一つの命題の眞理の積極的證明にはならないのである。カントの價值理念の形式性は、彼がその命題の定立をば經驗世界と絶縁して求めようとした所に在る。單に至上の命令の要請のみを以て行爲の原理の内容を定めることはできない。だしかに經驗のみでは何が善であるかをいうことができないが、併し經驗なしでは又我々は何が善であるかをいうことはできないのである。カントの倫理の形式性を補うために、従つて多くの倫理學者は様々の解釋を試みるのであつて、一概に倫理的原理をば無内容とか空虚であると非難するのは、倫理學に對する不當の非難である。

價值判斷の相對性主張から倫理に對する懷疑的態度が生まれるのは、ウェーバーの結論の一つの好ましからざる影響であると思われるのであるが、このような懷疑が更に價值判斷に對する蔑視感を生ずるとすれば、それは厳しく戒めなければならぬ所であろう。

## 獨 占 と 競 争

シ ュ ム ペ ー タ ー に つ い て

山 部 徳 雄

シ ュ ム ペ ー タ ー は 従 來 の 經 濟 理 論 の 見 解 に 反 して 獨 占 を 讚 美 し た 。 獨 占 と は 經 濟 的 競 争 に お け る 企 業 家 の 經 濟 的 革新の勝利の結果であり成功せる革新家に對する褒賞である。しかしその獨占的地位は永續することができない。經濟的革新は他の多くの企業家によつて模倣されるのみならず更に新しい革新によつてとつて代わられるからである。資本主義の經濟的成長の過程とはまさにこのような企業家による絶えざる創造的破壊の過程であつた。かくしてシ ュ ム ペ ー タ ー は 獨 占 と 競 争 の メ カ ニ ズ ム を 資 本 主 義 の 經 濟 的 成長の強力な「エンジン」として彼の所謂經濟動態理論の核心においた。以下この動態的獨占理論に對して、私は次の二つの點を中心としてのべてみたい。

その一 シ ュ ム ペ ー タ ー の 獨 占 論 の シ ー マ を 以 て 解 する に 、 獨 占 と は 繼 起 する 經 濟 的 革新 による 經 濟 的 變 動 の 現象であつてもし假にかかる創造的破壊が生じないとすれば經濟は一般均衡のモデルの適合する循環過程において安定するであろうとなす可能性が多々存する。シ ュ ム ペ ー タ ー は この 點 如何なる 見 解 を 以 て いたか、問題はこれである。

思うに企業の技術的組織的進歩の過程は市場の構造を變革してゆく過程でもあつた。經濟的革新がなくなれば獨占利

潤は消滅し完全競争を前提とする一般均衡が成立するという論は餘りに早計である。<sup>(註1)</sup>更に現今大企業の行爲をみるに企業間の關係の組織化を通じて漸次集團化の相様を呈しつつある。その場合各企業が夫々自己の利潤極大の行爲をすれば均衡へのメカニズムが作用して市場が安定するという要因は存しない。市場は人と物との關係を調和し安定せしめる不可思議魔法の中立的裝置ではない。革新がこの場合大企業へどれ程の競争力或いは契約力を與えるか。市場の構造の變化が革新による利潤獲得の魅力を減少せしめることはないか。市場構造の分析が必要な所以である。更に現實の市場構造の上でどんな循環過程が生じているかの考察も重要となる。シムペーターは市場を中心とする従來の獨占の分析に對してどんな見解をもつていたか。

その二 シムペーターは資本主義の發展過程を、質的變化による生産性の上昇と功利主義的合理精神の凡ての生活と文化に擴大してゆく過程であるとして捉らえた。即ち「資本主義が如何に合理的成長の過程であるかを示す彼の論旨の斷片を次にとり出してみよう。<sup>(註1)</sup>生産力は一路向上線を進むのである。不況は革新による好況の反動にすぎない。獨占は競争に對する勝利であるがそこには「安眠すべきベッド」は存しないのである。「獨占的企業の制限的戰略は企業を保護している長期的擴張過程の附隨物にすぎない。」大企業においては技術的進歩が一部の専門家の職務となりつつある。「經濟的進歩は非人格化され自動化される傾き」を生ずる。かくて企業家は不必要となるのである等々。まさに資本主義の發展は利潤追求の過程というよりはむしろ合理性の追求のそれである。<sup>(註2)</sup>しかしシムペーターが發展の過程をみる場合の合理性の意味内容と企業家が考へる合理性のそれとが一致しているか否かが問題である。成程シムペーターは企業家の合理主義的精神構造を高く評價しそして企業家が凡ゆる經濟的機會をとらえて合理的に利用してゆくことを強調した。が企業家の合理的活動の對象となるものはあく迄利潤である。では何故に企業

家の利潤追求が資本主義の所謂「合理的」發展をなさしめるのであろうか。ここに彼の獨占と競争によるメカニズムの理論のマチックが存在する。抑、彼の理論においては企業家は利潤を獲得する爲には必ず經濟的革新を行わなければならない。革新のない所には利潤は存在しないのである。そして又競争によつて獨占は永續することができない仕組になつてゐる。そのような理論を前提とする限り發展は即ち生産力の上昇であり合理性の擴大であるといえるのは自明の理である。そしてこの理論を作業假設として過去の資本主義の發展に適用した場合我々は彼の直觀の正當であつたことを知るわけである。頻繁な創造的破壊と盛んな競争とが過去において支配的であつたからである。問題はこれからの資本主義において革新と競争がどれ程起りうるかということである。もしそれが存在しなければ彼の理論は無用なのである。従つて彼の理論を以て將來を豫測することは出来ない。革新があるか否かは現實の經濟社會を觀察しなければならぬのである。資本主義の「エンヂン」は將來強力に作用するかどうか。これが第二の點である。先にのべたシムペーターの資本主義の過程の描寫はその發展を所謂「合理的」にみよふとする彼のヴィジョンから生じたものである。獨占企業が果してその通り行動しているか否かは不明である。彼は發展過程における人間の合理的精神活動に信頼を示している。實はその事は人間そのものに對する信頼というよりはむしろ歴史の過程そのものに對する信頼である。この點レツセフェールを唱へた人々とも本質的には同じである。資本主義において生産力と「合理性」とは異常に發展した。しかし反面それは支配と力の關係を變化せしめていつた過程でもあつた。シムペーターにはパワーシステムに對する觀察がない。寡占市場における大企業との關係、各産業集團の組織化とそれらの間の關係をみる場合に競争力或いは契約力という概念は重要である。又「技術的進歩が自動化する」としてもそのビュロクラシイの機構を支配しているものは誰かということも考へなければならぬ。これらの考察は我々をして従來の狭い經

濟理論の中に止まることを許さない。經濟社會的條件の分析を無視して近代大企業の性格や動きをみることは出来ない。本稿ではそのことについて論述する暇はない。しかし近時理論家の長期理論への關心は自ら之等經濟社會的構造の分析とそこに生ずる經濟的機能との關聯において捉らえ初めた。「長期沈滞理論」もその一つの現われであるといつてもよい。以上の點を考慮した場合資本主義の「エンヂン」は今後も強力に作用しつづけるか。

註1 參照 J. A. Schumpeter, *Capitalism, Socialism, and Democracy*. 1950 (邦譯中山、東畑譯資本主義、社會主義、民主主義)

註2 參照 O. H. Taylor, "Schumpeter and Marx: Imperialism and Social Classes in the Schumpeterian System," *Nov. 1950*

二

シュムペーターが、従来の市場構造の分析を中心とする獨占理論について如何なる見解をもつていたか。この場合注意しなければならぬことは年代と共に彼のそれに對する見解が漸次變化していることである。しかしその變化は彼の理論體系の變化を意味するものではなくむしろ發展してゆく靜態的獨占の分析に對して彼の體系を擁護するものであるものであつた。

「シュムペーターの理論體系の基本的構造を示すものは一九二二年に出版された「經濟發展の理論」である。彼はここで所謂「動態と靜態との二元論」を展開する。即ち經濟發展の要因の存しない靜態的な經濟における循環過程が一般均衡のシュエーマで示される。歸屬の原理によつて利潤利子の發生する餘地は存しない。ついでこの靜態的均衡を破壊し次の均衡へ推進せしめる「經濟變動の純粹に經濟的」要因として經濟的革新を導入する。經濟的革新を行うこと

が資本主義における企業家の機能であり、それによつて企業家は「獨占利潤」を獲得する。「獨占利潤」は競争によつて消滅し新しい均衡状態が成立する。以上が「發展の理論」の骨子であるがここで問題となるのは、先に述べた如く經濟の循環過程が一般均衡のシュエーマで説明されていることである。循環過程とは經濟的革新の行われぬ所の靜態における經濟的機能の特質を説明せんが爲のものであるから完全競争市場のみでなく他の獨占的要素をもつ市場をも含ましても差支えないと考えられる。その可能性をシュムペーターの敘述の中に見出す。經濟的革新によらない自然的社會的要因に歸屬する永久的獨占が、循環過程において常に繰返して餘剰の収益を獲得していることを説明している箇所がある。<sup>(註2)</sup>更に經濟的革新の要因の一部をなす「新商品の製造」と「新組織の達成即ち獨占的地位(例えばトラスト化による)」の形成<sup>(註3)</sup>による利潤の發生について考えてみる必要がある。之等は經濟的條件を變動せしめるという點においては成程動態概念であるかもしれないが、完全競争を前提として説明し得る現象ではない。獨占的競争並びに寡占等市場構造の分析を行うことなしにはその獨占の性格をつかむことは不可能である。従つて循環の説明には之等の市場に對する考慮が當然必要となる。しかし一九二二年といへば獨占的競争寡占等の理論は未だ存在せず、完全競争における一般均衡のシュエーマという假空の觀念的創造物が支配していた時代である。そしてそれは又動態に利潤あつて靜態に利潤なしとするシュムペーターの命題にも好都合な武器でもあつた。彼がこのシュエーマを採用したのも當然である。ともあれこのシュエーマを假に作業假設として認めるとしても現實にはそれを適用させる場が存しないのである。後に至つてシュムペーターが完全競争理論を自明の理として排撃した所以でもある。現實における經濟は獨占的競争並びに寡占の形態が支配的である。經濟的革新も、それが之等の市場構造を如何に變化せしめ、市場に存在する革新的企業にどれ程の獨占力を附與したかという點からみられなければならない。<sup>(註3)</sup>三〇年代に至つて漸く獨



占的競争と不完全競争の理論がチェンバリンとロビンソンによつて初めて行われたのである。

我々は「發展の理論」が經濟發展の原動力として經濟的革新を強調したこと自體は正しいとしても、それが市場構造を變化せしめることを見逃していたことを知つた。かかる完全競争を前提とする限り利潤は革新によつてのみ生ずる。ついで彼の「景氣變動論」(註5)(一九三九年)について市場の問題が如何に取扱われているかをみよう。この書物は通常いわれている如く「發展の理論」の體系を歴史的統計的事實を以て證明しようとした努力の結實でありその點においてにおいても市場構造から生ずる獨占が經濟的革新の度を妨げるといふ可能性は毫も存しない。しかしシュムペーターは循環過程における獨占の存在をはつきりと認め、不完全競争という項目の下に獨占寡占的競争に關する従來の理論を検討しつつ彼獨占の結論を導いている。彼の不完全競争の理論についてみよう。ここで最も重視されたのは「決定性」の問題である。即ち彼は「經濟分析の最初の而も主要な仕事は」その體系の特性を探求しそれが決定的であるか否かを知らなければならぬ。そしてそれが決定的であるという證明が即ち經濟理論のマグナカルタとして記されるのである」と。かくしてまづ完全競争の「特種のケース」が議論される。そして完全競争の世界において均衡への眞の傾向が存在することを決論する。ついで不完全競争をとりあげこのような均衡への傾向があるか否かを検討する。この場合の論の進め方もそのような傾向が現實の不完全競争の場合にあるか否かを求めてゆくという態度ではなくむしろ「完全競争のケースの領域を離れた時均衡への傾向を疑問に思つてゐる人々に對してその存することを再び信ぜしめることを目的としており、又既に信じてゐる人々に對しては彼の論述の一部分をオミットしてもよいと釋明している」といわれる如き態度なのである。以下不完全競争についての彼の見解をみよう。完全獨占においては均衡は決定する。双方獨占では供給曲線と需要曲線が相交する中のある均衡を想定する。寡占の分析では企業間の闘争が

なくなれば均衡への傾向が生ずる。この場合企業の間は何等かの協調があつたとしてもアウトサイダーの競争によつて均衡が成立する。しかし又妥協によつて均衡の成立しないこともあるがこの場合の「不決定性」は我々にとつては重大なことではないとシュムペーターは斷論している。又獨占的競争の分析には従來の完全獨占の分析武器が適用されてゐた。之等に對して彼は獨占競争の價格は單にその一企業のみ行為の函數ではなく他の多くの企業行為も影響するといふのである。従つてその需要曲線は一般に又長期的には非常に弾力性が高い。このことは獨占的競争が生産物の分化(Product Differentiation)の現象を除けば完全競争と接近していることを示す。均衡は勿論決定する。獨占的競争は完全競争よりも摩擦の多いといふことは企業の短期的ストラテジーの存在を可能とする。そのことが完全競争よりも優秀な設備を用いることの原因となる。優秀な設備もつことによつてそのオプティマム迄生産する必要はなくここに過剰設備が生ずる。かくて彼は従來の獨占的競争市場における過剰設備の存在に對する理論とは異つた見解をのべている。以上がシュムペーターの不完全競争の分析であるがその敘述の過程において彼が如何に巧妙に「不決定性」の問題を回避したか、そしてそこに結論として不完全競争のサブケースの多くの場合均衡への傾向が認められるといふことを導き出したかをみる。従つて循環過程における不完全競争の存在は循環過程における認識論として一般均衡のモデルを使用することの妨げとはならないと斷定出来るわけである。同じ一般均衡のモデルを使用して「發展の理論」の場合とは異つた意味内容をもつてきたのである。しかし不完全競争の本質的な價值は何等認められていない結論となつてゐる。市場構造の相異からくる企業行為の質的な差異は全く無視されている。所謂革新によつてのみ獨占利潤は發生するという立場は保たれてゐる。では彼がどのようにして「不決定性」を排除したかをみよう。即ち寡占双方獨占においては部分均衡論の立場から販賣曲線を使用し以て均衡の決定を論じているのであるが、

實はこの曲線自體が「不決定」なのである。というのは企業相互の關係が緊密な等の市場では一方の動きは他方の動きを意味するからである。この曲線を確定する爲には相互に何等かの協定を行わなくてはならない。ここで市場の安定が生ずるわけである。従つてこれらの市場で均衡が決定したからといつてその結果を直ちに一般均衡のモデルで説明することは不可能である。又獨占的競争を説明する場合それが「生産物の分化」以外は完全競争と同一であるといつて一般均衡のモデルを適用しているが、他方他の多くの企業の行爲とは切離されて―それは完全獨占の場である―部分均衡論の場で問題を取扱つていのである。部分均衡と一般均衡の理論的モデルはかくも鮮かに交互に使用しうるものであるか。不完全競争市場では各企業が各自に利潤極大の行爲した場合そこに市場の安定を保證してくれるようなメカニズムは作用していない。混亂の反覆のみである。ここに市場の需給の關係を明確にする制度が必要となつてくる。企業關係の組織化がそれである。そしてこの場合企業の競争がどのような形態をとるかが重要な問題となつてくるのである。

以上シュムペーターの「景氣變動論」に展開されている不完全競争論についてのべた。そして彼が不完全競争論をより深化させるというよりもむしろ「發展の理論」において示されたシェーマにそれを適合させてゆくのに如何に努力しているかをみたわけである。しかし彼と雖も現實の事象とは異つた理論を何時までも保持し得るものではない。彼はついにその著「資本主義、社會主義、民主主義」(一九四二年)において循環過程における一般均衡を更には循環過程それまでも無視してしまうのである。資本主義とはそれ自體動的現象であつて「決して靜態的でないのみならず靜態たり得ないのであり、又完全競争というものは現在においても過去の如何なる時代においても決して現實的であり得なかつたことは極めて明白である。」と彼はいうのである。しかしこれは問題である。循環過程が完全競争である

という彼の理論が現實に妥當しないからといつて現實の循環過程に對する考察までも否定することは凡そ愚かなことである。彼には獨占をも含めた現實の循環過程のシェーマを作り出そうとする意欲がない。「發展の理論」の他の一つの支柱である經濟的革新のみに頼ることとなる。かくて彼は動態一元論に入つてゆくのである。この場合競争とは與件への適應を示す概念ではなくて革新をめぐる競争なのである。我々がこれまで問題としてきた循環過程のシェーマの考察は行われないのである。ここで展開される議論は彼のヴィジョンからする資本主義の事象に對する説明と資本主義の將來に對する彼の豫言である。従つて「資本主義、社會主義、民主主義」という書物は理論經濟學者としてのシュムペーターというよりは、一定の立場から資本主義の事象に對して説明を與えようとする歴史家としての彼の所産である。勿論理論經濟學者として設問している箇所も一、三ある。例えば短期價格の硬直性が總生産量の長期的發展にいかなる影響をもつか或いは大企業の時代には現存設備の價值維持が企業活動の中心目的となり費用節減的な一切の改良を停止せしめるや否やの問題がそれである。前者即ち價格の硬直性について少し論じてみよう。價格は漸次硬直性を帯びつつある。それは何故か。このことは今日市場分析からいつても重要な問題であり、ことにスキージー(註6)或いはホールとヒッチ等々によつて不十分なながらも解明されている。單的にいえば市場において緊密になつた大企業の關係を規整する一つの指標として、價格が選ばれるようになった結果である。この價格が企業間の力關係を反映していること更に販賣者の購買者に對する契約力の増大を意味することに注意すべきである。つまり廣義の契約的要素が多分に價格の決定の中に入つてくる。(註8)其の他價格の硬直性に對する説明として資本計算の安定とか消費者に對して價格變動の不安を與えないで合理的消費生活をなさしめる等々の理由が附せられるかもしれない。しかもそれは結果論である。消費者は成程選擇の權利をもつてゐる。しかしそれは限られた範圍においてのみである。このように考

えれば價格の硬直性が經濟の循環過程における重要な現象であることに気付く。シュムペーターはこの價格の硬直性をとりあげたけれども彼の意味する内容は所謂價格硬直性のそれとは異つてゐる。彼は短期價格の硬直性といつてゐるのである。即ち價格は短期的には硬直しているが窮局において長期的にはコストの引下げにより低下してゆくといふのである。ここにも價格硬直性の眞の問題が回避されてゆがめられた形で彼の體系の中に入つてゆくのである。價格硬直性は靜態における重要な問題である。價格の硬直性は長期的にみてもなくなるといふ要因は存しないのである。これを短期價格の硬直性としてコスト水準の低下との關係において捉えようとしているのは間違つてゐる。眞の問題はこうである。即ち價格硬直性は總生産量の長期的發展にいかなる影響をもつか。

我々はこれまでシュムペーターの靜態における循環過程を對象として論じてきた。博學なる彼は市場分析を中心とする獨占理論の進展には常に注意しそれを彼の循環過程の中にとり入れてきた。それは靜態的獨占理論の成果によつて彼の理論内容を豊富にする爲ではなくむしろその成果を去勢して彼の循環過程を説明する爲のものであつた。それは彼の強烈なヴィジョンによつて—ただヴィジョンのみで—靜態的獨占論の内容を無意味なものにさえするのみか曲解されたものでさえあつた。そしてその結果は彼の理論内容から循環過程そのものの存在を抹殺してしまはなければならなかつたのである。彼の經濟理論の一つの支柱である一般均衡のモデルは放棄されるのみならず再び彼によつて取上げられる時には痛烈な批判の刃上にのせる爲のものであつた。彼にとつて残るあとのものは何か。それは、資本主義が生産性の上昇と合理性の擴大の過程であるという前提からなる動態のスキーマである。

註1 J. A. Schumpeter, "Theorie der Wirtschaftlicher Entwicklung" 1912(邦譯中山、東畑譯經濟發展の理論)  
註2 邦譯「發展の理論」四〇〇頁參照

註3 「價格と企業行爲」(三田學會雜誌二十六年十月參照)

註4 E. H. Chamberlin, "The Theory of Monopolistic Competition" 1932.

J. Robinson, "Economics of Imperfect Competition" 1933.

註5 J. A. Schumpeter, "Business Cycles" 1939. Harvard University.

註6 J. A. Schumpeter, "Business Cycles" p. 56.

註7 Paul Sweezy, "Demand under Condition of Oligopoly" Journal of Political Economy, June, 1939.

P. L. Hall and Hitch, "Price and Business Behavior" Oxford Economic Papers, May, 1939.

註8 Fellner, "Competition Among Few" 1949 New York.

### 三

現代における近代理論學者に比してシュムペーターの特にすぐれている點は彼の歴史的意識の強いことである。彼が資本主義の發展過程を歴史的統計的檢證によつて解明しようとしたに止まらずその見解は社會學をも包攝してゐたことは周知の事である。従つて彼の動態理論の體系は、スキージーの(註1)のべる如く純經濟的領域のみでなくもつと廣い範圍を含むと考えることが必要であるかもしれない。事實我々が社會の經濟的機能を考える場合、制度的社會文化的環境とそこに存在する人間の動機と行爲を分析することは重要である。しかしシュムペーターは經濟學と社會學とを統一した一つの體系を作ることしなかつた。經濟學と社會學とは社會の現實について各異つた要素を取扱ふ異つた科學であるとする。勿論このことは、經濟學がただ經濟的領域に止まつてゐることを意味するものではない。(註2)そして彼にとつて社會學の考察の對象となつたのは、經濟の自發的發展が社會現象の他の分野に如何なる變化を與えたかをみる場合である。經濟的發展と經濟的社會構造の變化との相互交渉というよりは、經濟的發展が一方的に社會構造



を變化せしめてゆく過程を考察するのである。經濟は絶えず發展してゆくのであるが、その結果生ずる社會構造の變化が資本主義を所謂「昇革」せしめるという結論を導くのである。かくて問題は經濟的社會構造の變化と經濟發展との關係についての考察に移るわけである。シュペーターののべる如く經濟的革新は發展過程の「エンデン」として強力に作用し續けるか。

シュペーターが經濟體制を内部から發展せしめる革新の擔手として企業家職能を強調し又經濟的進歩が所謂獨占の函數であると考えたことはよく知れる所である。思うに獨占的大企業は技術的生產能率においてのみならず資本信用の調達の容易であること更に小企業よりもはるかに不確實性に對して積極的に向つて行くこと等にすぐれている。かくて獨占は企業家に對して一層大なる利得を保證し又企業資本の蓄積を育成することによつて決定的な建設的役割を演ずる傾きがある」といわれる。我々は獨占の經濟的發展に與えたこれらの効果をよく知つてゐる。しかし獨占は更に他の効果をも生ぜしめたモルガンはそれについて次の如くいつてゐる。「獨占の効果は二重である。即ちある點までは、獨占は技術の革新者に對して改良によつて利益を収めうる見込を與えることから投資を誘發する。しかしある點を超えると、獨占的政策は獨占化された領域への經營、資本設備および勞働の流入を妨げまた阻止することによつて投資を阻害する。」獨占の高度化は市場構造の變化を意味する。ここで先ず技術進歩と市場構造との關係についてみよう。ドマールは、市場に存在する企業に對して技術進歩が與える影響の仕方を次の三つに規定する。(一)新生産方法を提供することによつて、(二)新生産物を創造することによつて、(三)もともと他の企業乃至産業に起つた技術變化の結果として、この生産物の需要或いは原材料の供給を増加せしめることによつて、この中(一)のみについて彼の説をのべよう。(一)新生産方法の導入は多く當該産業の競争の集中強度とその生産物に對する需要の弾力性に依存する。そ

して機械の質の優秀さは必しもそれが直ちに据付けられることを保證しない。企業はこの新機械がもたらしうると期待される利潤に對して既存設備の破棄から生ずる損失を比較考量しなければならぬからである。何時新機械が据付けられるかについてここで要點をのべる。産業の性格が集中(必しも純粹ではない)競争的であり、他の企業によつて新機械が採用されているか或いはその可能性の多い場合その企業にとつて既存設備の破棄はもはや決定的となる。またその企業の産出物の大きさがその産業の全體に比較してどの位を占めているかが重要となる。その企業の全市場を支配する割合が小さければ新機械の導入は支配の比率を多くする爲に魅惑的となる。これに反してその企業がすでに市場の全部でない相當部分を掌握しているならば、その場合征服すべきものは必しも多くなく、舊設備の破棄から生ずる損失を出來る限り小さくして、かなりの程度に減價消却を終えるまでは、新機械の獲得を繰延べようとする。投資が單に減價消却から賄われないことは全體としての經濟にもたらす結果は甚だ悲しむべきことであると、彼はのべてゐる。(註5)以上のべた所により技術的進歩が常に行われているということよりもむしろその技術的進歩を、企業家が投資の對象として取上げるか否か、又取上げた場合に經濟的發展過程にどれ程の衝擊を與えるかということが重要であることを知る。そして又大企業の關心は利潤獲得と同時に市場支配ということにも存することを知る。更に資源の支配ということも重要な關心事となる。この爲に大企業は相當の資本を注入している。要するに「技術進歩と新資源とが投資に及ぼす効果は相當な程度まで現在の制度的構造もつと正確に云えば競争の集中度に依存している。」(註6)シュペーターはこの市場の問題を考慮しなかつたのである。

ついでシュペーターは資本の蓄積の役割について餘り關心を拂つていない。(勿論信用創造による強制貯蓄を説明しているが。)ケインズは資本の限界効率的低下について論じた。ハンセンは更に(一)個人並に法人貯蓄の増加(二)人



口増加率の遞減(資本節約的な技術的革新)フロンティアの消滅の四つの経済的社会的条件をあげて長期沈滞論を展開した。之等に對する批判はターボアを始め多く存する。しかし現今において之等経済的社会的条件を考慮せずして経済現象の解明は不可能であり、更にケインズ、ハンセンの理論は實際に政策的に役立つたのである。ただそれは一時的ではあつたが。その點ハンセンの長期沈滞論も果して長期理論であるか否か検討されるべきものではない。彼は四の条件をあげているがその理論内容はケインズ理論と大差はない。正に「近代理論は短期の範圍を餘り出していない。長期における實質賃銀と利潤率との變化、資本蓄積の進歩獨占の發達と衰退社會の階級構造におよぼす技術的變化の大規模な反作用」等の考察が重要となる。シュムペーターもこの點において再反省されるべきものといえる。(註9)以上で本稿の論述を終ることになるのであるが後半特に長期沈滞理論については敘述が不充分である。後日の機會に譲りたい。

- 註1 Sweezy, "Schumpeter-Imperialism and Socialism," Introduction New York, 1951.  
 註2 O. H. Taylor, "Schumpeter and Marx: Imperialism and Social Classes in the Schumpeterian System," Quarterly Journal of Economics, November, 1951.  
 註3 Theodore Morgan; Income and Employment, 1947.  
 註4 Lloyd A. Metzler and Others; Income, Employment and Public Policy. Essays in Honor of Alarin H. Hansen. New York, 1948. (邦譯所得雇傭及公共政策上卷三十三頁)  
 註5 參照 W. J. Fellner, "The Influence of Market Structure on Technological Progress," Quarterly Journal of Economics, Nov. 1951.  
 註6 Lloyd A. Metzler and Others. (邦譯三十四頁)  
 註7 Hansen; Fiscal Policy and Business Cycles.  
 註8 G. Terborgh; The Bogy of Economic Maturity.  
 註9 中山伊知郎編 資本 河出書房 百六十八頁

学界展望

伸縮爲替相場と交易條件

白石 孝

國際收支の調整をいかなる視點から考え、どのような政策を採用すべきかということについて、われわれはまだ多くの未解決な問題をもっているけれども、modern economist の「國際收支の均衡・不均衡」に關する考え方の結論は、「それを一國の對外經濟活動を含めての全經濟活動の決定諸要因の均衡の上に規定する」ことであり、政策的には「國內均衡を犠牲にして國際均衡に到達することを不可」とする點にある。勿論この「國內均衡」なる意義はマルクセのいうような「インフレ」を惹起することなく維持し得る最大の國民所得、雇傭水準」であるが、ケインズがこの二つの均衡の調和的な實現について最もプリミティブな提唱したところのものは、周知の如く、爲替相場の自由變動を認めることと、人為的な手段によつて資本支出量を調節することであつた。(註1)しかし、前者に關連して、他國の經濟變動より隔離するを得るような國際貨幣制度への實

伸縮爲替相場と交易條件

際的要求に對し、右の基調からならぬかの解答が準備されなければならなかつたことはいふまでもあるまい。伸縮爲替相場の效果分析がその一つである。事實、國民經濟をして金本位の束縛から脱せしめ、經濟變動より隔離せしめんとする國際貨幣制度の提唱のなかには、大部分この伸縮爲替相場のそれを含んでいたからである。しかしながら、これと固定爲替相場 fixed exchange rate と對比して、どちらが前述の目的を果し得るかということについては種々異論がある。例えば、伸縮爲替相場は可成りからの變動から安定國を孤立せしめ得ると考へる見解や、その變動が價格變動よりなれば效果的であるが産出高とか雇用の變動よりなれば必ずしもその機能に期待し得ないとするものもある。(註2)問題はこれをどう考へるかである。本稿はまずメツラーに沿いつつこの點から出發し、更に最近とりあげられた爲替相場——交易條件のメカニズムを中心とする景氣調整のための國際經濟政策の效果分析の一端にふれたいと思う。(註1) R. F. Harrod, International Economics, 19, chap 7.  
 (註2) J. E. Meade and C. J. Hitch, An Introduction to Economic Analysis and Policy, 1938. A. P. Lerner, The Economic of Control, chap 28 の「興味あるもの」L. W. Mints, Monetary Policy for a Competitive Society, chap 5, 1950.  
 (註3) S. Laursen and L. Metzler, Flexible Exchange